

クルマの
インプレに想う。

モータージャーナリスト、レーシングドライバー、そしてチューナーと多方面で活躍する太田哲也が、世の中に自らのオビニオンを直球で発信し世相を斬る「オレの話を聞け!」。2年半に渡ってお送りしてきた当コーナーも今月が最終回。最後はモータージャーナリストとして現在のカーインプレッションに感じる疑問と、その解決策を提案してみる。

TEXT●太田哲也 (Tetsuya Ota)
PHOTO●篠原晃一 (Koichi Shinohara)
TEZZO

太田哲也の

オレの話を聞け!

本性をあばき出してくれ!

世にスーパースポーツをメインに扱うメディアは多くあれど (GEN ROQもそのひとつだけ)、どうも最近そういうメディアのインプレッション記事を讀んでいると、靴の上から足を掻いているみたいな気分になってしまふようになった。

スペック、デザイン、音などのフイーリングを詳細に、試乗フイーリングも丁寧にレポートされていく。ここには不満はない。だが大抵の試乗場所が首都高やワインディングで、本来のポテンシャルのはるか手前、2〜3割の領域で走っている。以前にも増して表層だけに留まっている印象が強くなった。

女性には読ませたくないが、たとえばAVに例えると、服を着たAV女優にインタビューしてレポートが始まり、スリーサイズや普段のしゃべり方などが披露され、それはそれで前段として期待が高まるのでよいとしても、さあ服を脱いでいよいよ

かと思ったら、うそっぽい演技で終わってしまったみたいない。いまだきのAVでそれはありえない。金を出してDVDを買ったファンは怒るだろう。いや、AVの話はあくまでも比喩で、言いたいことは、本番やれ! ……ではなかった、スーパースポーツの本性をあばき出せ! だ。

とは言え、それが難しい事情はよくわかる。昨今、タイヤの性能が格段に上がり、もはや一般道や山道で走りの性能を見極めることは危険だ。さらに横滑り装置などの電子制御が入りキャラが取り出しにくくなった。そしてこれこそが一番強い理由だろうが、近年、スーパースポーツの性能が格段に上がった (上がりすぎた)。端的に言えばパワーがあまりすぎなのだ。

たとえばマツダ・ロードスターのような小排気量の小型車であれば、法定速度を超えるかどうかは別として箱根の山道でもある程度本領を発揮させることはできる。しかしあのフェラーリF40 (472PS) さえも

SAMPLE

超えるビッグパワーを得た現代のスーパースポーツの場合、そもそもがフォーミュラやプロトタイプを経験したドライバー並みの腕がなくては扱える代物ではない。もっとも、例えプロドライバーだとしても、公道で本領を発揮させるとしたら相当にリスクの高い走り強いられる。

たまに「オンザレール感覚でスムーズだった」などと荒馬を手なづけ

た様子で描かれたレポートを見ることもあるが、それはクルマの限界まで到達してないからであって、かえってリアリティがない。

トロフィワイフじゃ我慢できない

もちろんスーパースポーツの楽しみ方は走りだけではないし、読者の

全部が走りに興味を抱いているわけではないのは十分承知だ。スーパースポーツの持つステータス性や見栄も気になるポイントだ。

「トロフィワイフ」という言葉がある。社会的に成功した男性が、年下の若くて美人な妻を持つ傾向が高いことを揶揄した言い方で、一般的にこの言葉が使われるとき、女性の人柄よりも若さや容姿が、地位・名誉・



スポーツカーのパフォーマンスアップとタイヤ性能の向上により、もはや公道試乗だけでの性能評価は難しいのが現状だ。太田氏自身も自らのクルマは必ずクローズドコースで試乗するというように、サーキットなどを用いたインプレッションの必要性が高まっている。



富を手に入れた男性のトロフィーとしてなぞられる。それが真実かどうかはさておき、少なくともスーパーカー雑誌を選ぶ際にはトロフィワイフ的な要素は強いだろう。

内面の人柄（クルマのキャラクター）よりも見た目によって、ステータス性やファッションアイテムとして選ばれる傾向はある。そういうニーズに対しては、タキシードでパーティに出るような雰囲気を変えてスベックや内装・外装などをレポートする素敵な記事はもちろんありだし、オレ自身も嫌いじゃない。でもそれは一般誌、もしくはそれに近い自動車雑誌が受け持てばいいわけで、GENROQを始めとする自動車専門誌は根っからの（熱狂的な）クルマ好きが読む雑誌だろうから、やはりクルマの内面を突き詰めたい。

クルマ好きなら格好良いかどうかは教えてもらわなくても見りゃわかる。内装が好きとか嫌いとかを解説されなくても感性の部分は自分の好

み。イイ女とお茶飲んで食事してスマートに会話した様子のお洒落なレポートよりも、ベッドでどうだったか？ どんな奮闘や出来事があったか？ をオレは知りたい。

深層に迫る解決策としては、BBCの人気自動車番組「Top Gear」みたいに、やはりそれなりに走れるステージを用意してレポートするしかないだろう。そういう日本版「Top Gear」的な企画をどこかのメディアがやらないだろうか。いや、きっと編集者なら誰でも「Top Gear」のような企画をやりたいと思ってるだろうけど、なかなか実現が難しいのが現実だ。もう少し説明しよう。

ふたつの難点

その昔、オレがまだ現役でレーシングドライバーをしていた頃、「限界インプレッション」という企画をやっていた。スーパーカーをサーキットに持ち込んで、限界時にどんな挙動を示すか、いわばクルマから聞こえてくる悲鳴や歓喜の声をレポートしてキャラクターを検証する企画があった。

それなりに評判がよく、本にもなったが、難点は経費が掛かることだった。日本はサーキット借上げ料金が異常に高いので編集コストが嵩んでしまう。当時、その出版社では社長自ら音頭をとり、会社をあげて社他の関連雑誌も協力してくれたからこそ続けることができた企画だった。

それでも毎月は可能で不定期連載のカタチをとった。一誌だけではなかなか難しかったろう。

もうひとつの難点は、あの頃はまだ現

役レーサーだったので、読者から少し距離を置いたかもしれないこと。F1の車内映像を見ようというキワモノ的に捉えられてしまう傾向もあったろう。今もときどきサーキット試乗レポートを見かけるが、現役レーサーが運転すると、サーキットに興味のない人からは「自分たちとは無縁」と捉えられてしまいがちだ。そこが上手く説明できていたかどうかは反省点だった。

だから場所はサーキットだとしても、それが目的ではなくあくまでも手段で、知りたいのはサーキット性能ではなく、クルマのキャラであることを強調すべきだ。この点、「Top Gear」はよく考えられていて、プロドライバーではなく、でもスポーツカーを転がせる院と知識と度胸があるジェレミー・クラークソンたちがレポートする。彼らのような一般人と環境が理想だが、でもあんなTV司会者、日本にはなかなかいないよな……。

キャラを知ると親密になれる

愛車でオレは一度はサーキットを走ることになっている。すると愛車のキャラがはつきりとかわり、より親密になれる。買って良かったなと思える。

走らせる環境には恵まれている方だろう。初心者向けにドライビングレッスンを主宰し定期的にサーキットを借りて、校長の立場だから日中は忙しいが終わりの合間にちよこつと参加者に混じって走らせる。イベントの中にスパタイGPというタイムアタック競技もあって、それに愛車や教習車（最新スポーツカーの場合もある）とともに賞典外で参加することもある。編集者や池沢早人師さんなどクルマ好きの有名な人も賞典外で参加してもらっている。

そんな話を連載の打ち合わせをして来た編集担当Kとしていてふと思いついたのだ。どうせならその場を使って、スーパーカーを検証してみたらどうか。

校長のオレ以外にゲスト講師もいるわけだし、みんな現役というわけではないけど、特別なサーキットの世界を描くのではなく、読者や一般のオーナーが自分でも体験しようとしたらできる。でもやろうと思うとサーキット代や安全のリスク、未知の世界に踏み込む怖さから踏み込めないスーパーカーのキャラを伝えるのだから、それはかえって都合かも。

編集担当におだてられりゃあ猿も木に登る。考えてみるとオレ自身フォーミュラやグループCの他、さまざまなカテゴリーや車種のドライビング体験があるから、そういう経験値から対比できるし、安全にクルマのキャラクターを引き出すことができ

る。誰かに乗らせてアトバイスもできるよな。それにサーキット代も節約できるし。

どのみち「Top Gear」のような大掛かりな予算をかけたことはできないけれど、できる範囲で「和製Top Gear（コンパクト版）」の企画をぜひやってみてほしい。読者のみなさん、アナタの声も聞かせて欲しい。

ドライブスクールを定期的の主宰しているため、サーキットを専有し走行する機会が多い。ストリートとサーキット、双方で得たインプレッションを今後も展開していきたい。



ドライブスクールを定期的の主宰しているため、サーキットを専有し走行する機会が多い。ストリートとサーキット、双方で得たインプレッションを今後も展開していきたい。

太田哲也氏の今後の活動



今後の太田哲也氏自身やサポートする活動については各ウェブサイトにて情報を発信していきます。国土交通省安全運転推進事業である「Tetsuya OTAスポーツドライビングスクール」、太田哲也氏がプロデュースするカスタム&コンプリートカーのブランド「TEZZO」、太田哲也氏がサポートする「若者のクルマ離れなんて言わせない!」を合言葉に20代がクルマの魅力を同世代に発信する「Next Car Generation」など、是非アクセスしてください!

●ドライブスクール <http://www.sportsdriving.jp>



●TEZZO <http://www.tezzo.jp>



●Next Car Generation <http://ncg.sportsdriving.jp/>